

* これは実際の試験問題ではありません。
(This is NOT the actual test.)

No.000001

受験番号				
------	--	--	--	--

学習能力考査

人 文 科 学

資料及び問題

指示

係りの指示があるまでは絶対に中を開けないこと

0. See you ICU!
1. この考査は、資料を読んで、あなたがその内容をどの程度理解し、分析し、また総合的に判断することができたかを調べるためのものです。
2. この冊子は前半が資料で、後半に 40 の問い(1-40)があります。
3. 考査時間は、「考査はじめ」の合図があってから正味 70 分です。資料を読む時間と解答を書く時間の区切りはありませんから、あわせて 70 分をどう使うかは自由です。
4. 解答のしかたは、問題の前に指示してあります答えが指示どおりでないと、たとえそれが正解であっても無効になりますから、解答の仕方をよく理解してから始めてください。
5. 答えはすべて、この冊子といっしょに配られる解答用カードの定められたところに、指示どおりに鉛筆を用いて書きいれてください。一度書いた答えを訂正するには、消しゴムできれいに消してから、あらためて正しい答えを書いてください。
6. もしなにか書く必要があるときは、必ずこの冊子の余白を用い、解答用カードには絶対に書きいれないでください。この冊子以外の紙の使用は許されません。
7. 「考査やめ」の合図があつたらただちにやめて、この冊子と解答用カードとを係りが集め終わるまで待ってください。集める前に退場したり用紙をもちだすことは、絶対に許されません。
8. 指示について質問があるときは、係りに聞いてください。ただし資料と問題の内容に関する質問はいっさい受けません。

「受験番号」を解答用カードの定められたところに忘れずに書き入れること

蠅と金魚鉢

1

かつて宗教は、近代合理主義の伸展とともにやがて歴史の遺物となって消滅するかに思われていた。だが、今日の世界を見渡す限り、宗教は人々の自己理解の最も重要な一部であり続けている。ときにそれは、偏狭なファンダメンタリズムや無差別のテロリズムのように極端な表現となって噴出する場合もある。しかし、われわれが宗教の生きたリアリティを経験するのは、もっと落ち着いた日常的な場面においてであろう。国や地域を越えた人々のグローバルな交流は、それぞれの地域に分かれて存在してきた宗教の違いを顕在化させる。以前は東の間の海外旅行などで知るだけだった遠くの人々が、今ではわれわれと同じ生活圏で暮らす隣人になっているからである。なかには、それまで自分が思ってもみなかったようなものの見方や考え方に会うこともあろう。そして、異質なものと出会いは、新鮮で喜ばしいこともあるが、ときに自分のアイデンティティを揺るがす深刻な脅威にもなり得る。他人の宗教を理解しようと努めることは、それゆえ自分が何か特定の宗教を信じているか否かにかかわらず、現代世界では非常に大切なことである。

ただ、そうは言ってもなかなか理解しがたいこともある。そもそも、宗教というものは何によらず、人を頑固にし排他的にしてしまうのではないだろうか。キリスト教徒はイエス・キリストこそ唯一の救い主であると信じ、イスラム教徒はコーランこそ神の最終的な啓示であると信ずる。ユダヤ教徒は毎朝「自分が異教徒に造られなかったことを感謝します」と祈るし、仏教徒は八正道こそ悟りに至る唯一の道であると教え、ヒンドゥー教徒はヴェーダこそ永遠のダルマであると主張する。一神教であろうと多神教であろうと、民族宗教であろうと世界宗教であろうと、宗教というものはそもそも自分の信仰対象を絶対と考えるところから出発するのだから、どうしてもお互いの対立と紛争の原因になってしまうことが多いのではないだろうか。

まずはこの点から始めよう。なるほどわれわれは、上の諸発言の客観的な意味を理解しているつもりである。だがそれは、発言者本人たちにとっての意味と同じであろうか。先年亡くなったウィルフレッド・キャントウェル・スミスという宗教学者は、現代人が他人の宗教を見る時、「金魚鉢の周りを這い回る蠅」のように見ている、と指摘した。蠅は、水の中の金魚を外から興味深げに観察するが、その金魚たち自身が何を感じているかを考えようとはしない。われわれもそれと同じではないか、というのである。スミスは、第二次世界大戦前後にインド（現パキスタン）のラホールという町のキリスト教大学でイスラム史とインド史を教え、プリンストン大学で東洋語学を修め、後にハーヴァード大学世界宗教研究所の所長となった人である。彼は、当時盛んであった論理実証主義の哲学者たちが宗教的な言述を無意味と決めつけることに苛立ちを隠さなかった。論理実証主義は、論理法則と検証可能な経験的命題だけを正しい知識に至る道として承認する。例えば、「空は牛である」という古代エジプト人の言葉は、「観察

可能な事実と矛盾する」として斥けられるのである。しかし、古代エジプト人はわれわれが「空」と「牛」として知っている二つのものの区別ができなかったわけではなく、その区別を弁えた上で、二つを同定することに彼らなりの意味連関を表現しようとしていたはずである。言述は、それ自体で万人にとって同一の固定的な意味をもつわけではなく、それが誰かから誰かへと伝えられる過程の中である固有の意味を獲得する。記号論の観点からすると、記号とその使用者とのこうした関係に注目する分野を「語用論」(pragmatics)と呼び、記号と記号との関係を論ずる「統語論」(syntactics)や記号とその指示物との関係を論ずる「意味論」(semantics)から区別するが、スミスは宗教言語の特質を「語用論」へと拡げて考える必要があることに気づいた人の一人であった。彼はまた、当時のキリスト教宣教師たちが牛を崇めるヒンドゥー教徒を見て「偶像礼拝」と非難したことに腹を立てている。たとえ同じ一頭の牛がそこにいたとしても、ヒンドゥー教徒は「彼らが見ている牛」を崇めているのであって、「宣教師が見ている牛」を崇めているのではない、というのがその理由である。「金魚鉢の周りを這い回る蠅」というのは、こうした皮相な他者理解で事足りれりとする人々のことである。われわれは蠅よりももう少ししな理解を求めなくてはならない。

「偶像礼拝」については後段で詳しく取り上げるとして、ここでは先に掲げた諸宗教がなす絶対性の主張について説明しておこう。確かに諸宗教にはこうした主張がある。だが、これらの主張がもつ原初的な確信は、他の宗教との比較の末に生まれたものではない。宗教は、われわれが何かの買い物をする時のように、値段や性能を比較考量した上で選ぶものではないのである。信仰はむしろ、恋愛にも似て、ある時向こうからやってくる。それはこちらが自由にコントロールできる事柄ではなく、「出来事」であり「出会い」である。仏教の教えで言えば「因縁」であり「縁起」である。「絶対」とは、*ab-solutus* というラテン語が示すように、他との関わりから解き放たれていること、つまり「対立を絶する」ことを意味しているのであって、他と比べた上で相対的に一番なのではない。信仰の表現は、それゆえ「比較級」ではなく常に「最上級」であらわされる。だがそれとて、ヒンドゥー教でブラフマンを「第二のない一者」と呼ぶように、比較の上での「最上」ではない。だから、「自分の宗教が一番」と言うことは、他の宗教が「劣っている」とか「間違っている」と言うこととはつながらないのである。先に引用した諸宗教の発言は、その発言者たちの意図からすれば、今ある自分の存在を感謝し、その超越的な祝福の根拠に全幅の信頼を寄せる、という感謝と信頼の表明に他ならない。自分に関する実存的な表出であるから、他の宗教はさしあたってその人の関心の埒外に置かれている、という方が正しいであろう。その場合、「私の一番」は「他の人の一番」とも両立可能である。むしろ、そのような信仰をもつ人こそ、他の人のもつ信仰にもまた同じような深みがあることを推し量ることができるであろう。金魚の気持ちを一番よくわかるのは金魚である。

2

事実、歴史を振り返ると明らかなように、宗教は寛容や信教の自由という思想の発達に本質的な貢献をなすことがある。寛容は、複数の歴史的淵源が相互に共鳴して複線的に発達した思想である。16・17世紀に発するその源流には、穏やかな理性を信頼するエラスムスのようなルネサンス的人文主義や、人間は究極的な真理を正確に把握することはできないとするペールのような懐疑論もある。うち続く宗教戦争に疲弊して広まった宗教一般に対する人々の無関心も、その一因となったであろう。ロックやヴォルテールのように、社会秩序の安定や経済上の利益といった実際的な関心事が寛容の政策を推進する力になる場合もある。これらの諸要因は、疑いもなく寛容の拡大に役立ったことであろう。しかしそれらだけでは、諸宗教の共存を持続的に維持する体制を生み出すことは困難であった。人文主義者の寛容論は、理想を描くには適切であっても現実の政治原理には不向きであった。合理主義や懐疑論による寛容思想の影響範囲は、知的なエリート階層に限定されていたし、実利的動機による寛容は、状況の変化や支配者の都合により容易に後退したり撤回されたりする。寛容は、最近のある研究者が言うように、「寛容それ自体に内在的な価値を認める純粋な信念と献身」によって内側から支えられる時、はじめて首尾一貫した有効な歴史駆動力となるのである。

そのような寛容の精神の内在的な根拠の一つが、他ならぬ宗教的確信そのものであった。なかでも、日本ではあまり知られていないが、17世紀のニューイングランドに生きたロジャー・ウィリアムズの例は重要である。ウィリアムズは、燃えるような信仰心をもったピューリタンであるが、その信念のために時の政府から迫害を受けて逃れねばならなかった。そのため彼は、後にみずから建設した町では、政治権力が宗教の事柄に及び得ないことを明記した成文法を定め、史上初の「政教分離」社会を確立したのである。この町は現在のロードアイランド州都となっているが、彼の求めた「信教の自由」の原則は、今日われわれが享受している基本的人権の根幹として、アメリカばかりでなく世界の多くの国々に受け入れられている。ピューリタンはしばしば不寛容の代名詞のように見られ、事実そういう面も少なくないのだが、その中から彼のような人物も出てくることは忘れられてはならない。

ウィリアムズがこのような体制の確立に努力したのは、彼が宗教に無関心な世俗主義者だったからではない。彼は、それこそが神の意志だと確信していたのである。神は、個々人の良心を自由なものとして造られた。だからそれは、たとえ主流派や多数派のものとは異なっても尊重されるべきだ、というのが彼の確信である。プロテスタントやカトリックというキリスト教内部の寛容だけでなく、ユダヤ教徒でもイスラム教徒でも無神論者でも、どのような信条の持ち主であれすべての人に市民権を認めるという彼の思想は、彼自身のこのような信仰の確信に裏打ちされている。そうであるがゆえに、彼は時代に先んじて多くの困難に直面しながらも、なお揺らぐことなく寛容の原則を貫くことができたのである。ウィリアムズの例は、自分の信仰のかけがえのなさの認識が、単に自分のことだけにとどまらず、他人の信仰の同じようなかけがえのなさの認識をも導き出すことを示している。

ところでウィリアムズは、他宗教を受け入れる時は、まずその宗教の教義内容をよく知った上で受け入れるべきだ、と論じたわけではない。いったい、「他人の宗教を理解する」ということは、「その宗教の教義内容を理解する」とこと同義なのであろうか。実はここに、われわれの陥りやすい落とし穴がある。先に触れたスミスは、現代人はみな“the heresy of believing”に陥っている、と語って人々を驚かせたことがある。この異端は、あまりに広く行き渡っているため誰も自分ではそれに気づくことがないほどで、しかもそれは、宗教を信じている人に限らず、宗教をもたない人も、宗教を疑う人も、宗教を批判する人も、みな等しく陥っている誤謬だ、というのである。注意してほしい。これは、“the heresy of non-believing”ではない。“The heresy of believing this or that”でもない。端的に「信ずることが異端だ」と言っているのである。どういうことか。それは、「宗教とは何かを信ずることだ」という考え自体が、近代における一つの逸脱現象だ、ということである。何世紀にもわたって、信ずるということは宗教的な人々の生にとり主要なことではなかった。ところが、人々は今日、宗教的な人とは何かを信ずる人のことだ、と考えている。つまり、あれこれの教理命題に同意することだ、と考えている。これが彼の言う「信ずるという異端」である。

ずいぶん大胆な主張だが、スミスはそのために豊富な論拠を提示している。これは彼の執筆のスタイルで、彼の本には膨大な分量の注が付されるため、しばしば本文が一冊の半分の厚さのところまで終わってしまうほどである。ここでも、引証された文献は聖書にはじまり、英語文献だけでもチョーサー、シェイクスピア、ベーコン、ホップス、ロック、ヒューム、ミルにまで及んでいる。聖書については、1611年の欽定訳聖書を用いて、“faith”と“belief”という言葉が何度あらわれるかを数えている。どちらも「信仰」という名詞で、現代のわれわれには意味の違いがほとんどわからないが、驚くべきことに、前者の233回に比して、後者はたったの1回しか使われていない。二つの言葉はどう違うか。スミスによれば、“faith”は人格的信頼をあらわすのに対し、“belief”は知的同意をあらわす。現代人は、キリスト教の信仰をもっぱら後者の意味でとらえているが、それは必ずしも聖書における「信仰」の中心的な意味ではない、ということである。

名詞ではなく、動詞ではどうだろうか。実は英語には“faith”の動詞形がないので、「信ずる」という動詞にはすべて“believe”が用いられる。しかし、この“believe”という動詞の意味にも、同じような変遷が見られるという。この動詞は、かつては人格的な相手に対する信頼という意味で使われた。“I believe you.”とは“I trust you.”と同義であった。これは、“believe in”とも表現できる。前置詞“in”の後に来るのは、信頼できる相手である。それが、ベーコンやホップスやロックを経て次第に“I believe your word.”ないし“I believe what you say.”の意味になり、やがて1843年のミルの著作に至って“I believe that A is B.”という命題の形式が見られるようになる。現代人が「私は神を信じます」と言うと、「あなたは神が存在することを認めるので

すね」と言われるが、そんな反応は近代までほとんど想像もつかなかったであろう。

“Believe”という動詞がとる目的語の変化は、その動詞の意味上の変化とも相即している。かつてこの動詞は確実さへの信頼を表現していたが、現代人はむしろ根拠が薄弱で不確かな意見を言う時にそれを使う。今日われわれが確実な知識をあらわす際に使うのは、“believe”でなく“know”という動詞である。だから“I believe so and so, but I do not know for sure.”などと言うのである。そればかりではない。“Believe”という動詞が三人称に使われると、不確実さだけでなく、主節と従属節の間に微妙な乖離が生じてしまう。試みに、以下の二つの文章を比べてもらいたい。

(A) I believe it is raining.

(B) She believes it is raining.

同じ構文であるが、主語が違うために、Aでは単純な叙述であった動詞が、Bでは別の焦点を結んで新しいニュアンスが生まれているのがわかるであろう。

神学史においても、「信仰」概念の理解には行きつ戻りつの揺れがある。中世のトマス・アクィナスは、主著『神学大全』の中で、信じるという行為を「知性が意志によって承認へと動かされる」ことであるとし、これを知性と意志の両面から考察した。彼によれば、知性には「知識」(notitia)と「承認」(assensus)が、意志には「信頼」(fiducia)が属している。宗教改革者のルターは、このバランスを意志の側へと大きく傾かせ、信仰を「信頼」と同義にとらえた。その後のプロテスタント神学は、トマスに倣って信仰の要素を「知識」「承認」「信頼」の三つに分けたが、迷信的な信仰の弊を避けるため、その力点はむしろ「信頼」から「知識」の方へと逆戻りしている。

人格的信頼から知的承認へ、人や物の真理から命題の真理へ、“believe in”から“believe that”へ、という変遷がここに見て取れる。しかし、信仰には本来さまざまな表現がある。儀礼や神話、音楽や芸術、歌や踊り、人格や道徳の形成、結婚や葬儀といった社会的な制度や慣習、それに教理や神学の発達という知的努力などである。その中で知性にかかわる表現が他を圧して中心的な位置を占めるようになった時、宗教を信ずることはある命題の集合に同意することになった。そして一つの教理体系に同意することは、他の教理体系を拒否することにもなった。“The heresy of believing”の始まりである。

他人の宗教を理解することも、この変化とともに困難になっていった。アウグスティヌスが4世紀末に『真の宗教』(De Vera Religione)を書いた時、彼は他宗教と対比してキリスト教を「真の宗教」と見ていたわけではない。彼の言うreligioはむしろ「敬虔」ないし「礼拝」と訳されるべきで、彼が語ったのは、教理や儀礼の体系ではなくて、一人一人の神との関わり方である。だから英語のreligionという言葉も、17世紀半ばまで単数形で使われるのが普通であった。啓蒙主義の到来と共に、それは複数形で使われるようになり、「キリスト教」「イスラム教」「ヒンドゥー教」などと実体化された体系のあれこれを指すようになったのである。

実は、他人の宗教を理解するのが特に苦手なのが、ユダヤ・キリスト教の伝統にいる人々である。先に触れた「偶像礼拝」という概念が彼らの理解を不当に邪魔してきたからである。これは、超越的な神を有限な被造物の像で表現することの不可能性に由来する禁令で、「神でないものを神として拝む」ことを戒める言葉である。スミスが憤激したように、欧米からやってきた宣教師の中には、アジアの諸宗教をこの言葉で片づけようとした人々が少なからずあったことであろう。そのような態度では、他人の宗教を理解することはとても覚束ない。

そこでわれわれは、聖書の中でこの言葉がどのように使われているかを調べてみよう。といってもその調べ方は、専門的な知識を必要としない簡単な方法である。つまり、スミスがしたように、数を数えるのである。彼の時代と異なり、今では聖書もデジタル化されてウェブに載せられており、誰でも無料で一瞬のうちに検索ができる。ここでは1987年発行の『新共同訳聖書』を見てみよう。検索結果によれば、「偶像」という言葉は、旧約聖書に119回、新約聖書に33回、あわせて152回用いられている。

まず旧約聖書の用法を見ると、そのほとんどは三つのカテゴリーに分けられる。第一は、旧約の民イスラエルの人々が自分で偶像を造ったり拝んだりすることを禁止するもの、第二は、偶像にはイスラエルを救う力がないことを強調して、彼らがそれに心を寄せないよう警告するもの、第三は、こうした禁止や警告にもかかわらず、それを破って偶像礼拝の罪に陥ってしまったイスラエルの人々を非難するものである。ごく大まかに分けて、第一が20例、第二が20例、そして第三が80例ほどある。だがここで注意すべきなのは、そのほとんどすべてが、イスラエルに対する言葉だ、という点である。イスラエルが禁止を受け、イスラエルが警告され、イスラエルが非難されているのである。

たとえば、旧約聖書の「申命記」には次のような一節がある。

我々がエジプトの国にとどまっていたことも、国々の間を通過して来たことも、あなたたちは、自ら通って来たので、よく知っている。あなたたちは、彼らが木や石、銀や金で造られた憎むべき偶像を持っているのを見て来た。(29:15-16)

ここでは、エジプトの神々が「偶像」と呼ばれている。しかし、その次の節を読むと、それがなぜだかわかる。

今日、心変わりして、我々の神、主に背き、これらの国々の神々のもとに行って仕えるような男、女、家族、部族があなたたちの間にあってはならない。(29:17)

つまり、エジプトの神々が「偶像」と呼ばれるのは、イスラエルの人々が今それに抗い難く

心を惹かれているからなのである。われわれはユダヤ・キリスト教が「唯一神教」だと教えられているので、聖書の中には他の神など存在しない、と考えがちである。だが、後代の発展がいかにもあれ、少なくとも旧約聖書時代の人々にとって、それぞれの民族にそれぞれの神がいることは否定のしようもない当然の事実であった。しかも、彼らの常識では、国の力はすなわちその国が拝む神の力であった。だから弱小民族のイスラエルは、彼らを蹂躪し続けてきた強大な周辺諸国の神々がどんなに力強い存在であるかもよく知っていたのである。その魅力が、それらの神々を「彼らにとっての」偶像にするのである。しかし旧約聖書には、エジプトやバビロニアの人々が自分たちの国で自分たちの神を礼拝することそれ自体を直接「偶像礼拝」と非難しているところはない。問題となるのは、イスラエルの人々が自分たちの神ではなく他の国の神々へと色目を使い出す時である。

新約聖書でも同じことが言えよう。まず気がつくのは、イエスがこの言葉を一度も使っていない、ということである。33回の「偶像」という言葉は、すべてイエス以外の人物が発したものである。しかも、そこで偶像礼拝を禁止され、警告され、非難されているのは、すでにキリスト者となった人々であって、他の宗教を信じている人々ではない。つまり、自分ではキリスト教徒であると言いながら、他の神にも二股をかけようとする人々である。唯一の例外はパウロのアテネでの説教（使徒言行録 17:16）で、ここではアテネの人々の信ずる神々が「偶像」と呼ばれている。ただ、パウロもこの説教が完全な失敗に終わった後、他の聖書の用法と同じように、この言葉をキリスト教徒だけに限定して適用するようになった（一コリント書 5:9-11を参照）。

いずれにしても、われわれはここで、他宗教を「偶像礼拝」と非難することは、どうやら聖書における本来的な用法とは違っている、ということを知ることができる。はじめに触れたように、言葉はその実際上の使用において具体的な意味を獲得する。単にその言葉が聖書に何回登場するかではなく、それが誰と誰の間でどのように使われているか、ということを知ってはじめて、その正しい意味を知ることができるのである。キリスト教は長い間、他宗教を「偶像礼拝」呼ばわりしてきたが、聖書に照らしてこの慣行は改められなければならないであろう。

5

この最後の点は重要である。なぜなら、そこに現代のわれわれが直面している宗教の諸問題を解決へと導く筋道が暗示されているからである。キリスト教徒の過誤を匡すには、彼ら自身の聖書に訴えるのが一番である。つまり、問題が金魚鉢の中にあるならば、解決の糸口も金魚鉢の中にある、ということである。冒頭に触れた原理主義（ファンダメンタリズム）の問題もその一つであろう。20世紀はじめのアメリカに抬頭したキリスト教の原理主義は、その名からして原理や原点への回帰であるかに見えるが、彼らが掲げた「教理の五要点」というものをよく見てみると、歴代の教会が枢要と考えてきた内容とは必ずしも同一ではないことがわかる。

そもそも、聖書の中から特定の教理を取り出してそれに同意することを信仰の根本とみなす、という考えそのものが、先に論じたごとく、聖書的な信仰理解からはだいぶ隔たっているのである。近年ではイスラムの原理主義もよく話題に上るが、これにも同じことが言える。歴史的なイスラム信仰からすると、彼らの主張は近代への反動である分だけ近代的である。例えば女性にヴェールの着用を厳格に課すことは、西洋風の服装が氾濫することを恐れてのことであるが、実はイスラム信仰が伝統的に大切にしてきた「六信五行」の教えとはほとんど関係がない。

こうした指摘は、それぞれの宗教伝統がもつ源泉そのものに訴えることで可能となる。つまり、彼らの尊重するものを尊重して、これを批判と形成の根拠となすのである。この作業は、当該宗教自身の内的な対話として起こらねばならない。原理主義者と言われる人々に向かって、われわれが近代の世俗原理に基づく寛容論を説いても、簡単には受け入れてもらえないであろう。ことによったら、かえってそれが彼らのアイデンティティを脅かし、反発とあっという間の不寛容を招いてしまうかもしれない。金魚鉢の外からあれこれと声をかけても、水面にさざ波が立つばかりで、中の金魚にその声は届かない、ということである。

結局、「他人の宗教を理解する」ということは、金魚鉢の外から傍観者のように中を眺めることではないにしても、さりとてその中へ「えい」とばかりに手を入れて水をかき回すことでもなさそうである。ときにそれは、中の金魚を外から共感的に見守るだけしかできない、という自己の限界を知ることでもあろう。われわれは、その点ではあくまでも蠅にすぎないのかもしれない。しかしこの蠅は、今や「考える蠅」である。

参考文献

トマス・アクィナス『神学大全15』稲垣良典他訳、創文社、1982年。

アウグスティヌス『真の宗教』（『著作集2』所収）茂泉昭男訳、教文館、1979年。

H. G. パールマン『現代教義学総説』蓮見和男訳、新教出版社、1982年。

Timothy L. Hall. *Separating Church and State: Roger Williams and Religious Liberty*. Urbana: University of Illinois Press, 1998.

Andrew R. Murphy. *Conscience and Community: Revisiting Toleration and Religious Dissent in Early Modern England and America*. University Park, Pennsylvania: The Pennsylvania State University Press, 2001.

Wilfred Cantwell Smith. *The Meaning and End of Religion*. New York: Macmillan, 1962; Reprint, Minneapolis: Fortress Press, 1991.

_____. *Believing: An Historical Perspective*. Charlottesville: The University Press of Virginia, 1977; Reprint, Oxford: Oneworld Publications, 1998.

Roger Williams. *The Complete Writings of Roger Williams*, vol.3. New York: Russell and Russell, 1963.

Perez Zagorin. *How the Idea of Religious Toleration Came to the West*. Princeton: Princeton University Press, 2003.

次の問題（1－40）には、それぞれ a, b, c, d の答えが与えてあります。各問題につき a, b, c, d のなかから、最も適切と思う答えを一つだけ選び、解答用カードの相当欄にあたる a, b, c, d のいずれかのわくのなかを黒くぬって、あなたの答えを示しなさい。

例 (41) C a D C b D C c D C d D

1. 民族宗教と世界宗教の対比で、正しいのは次のうちどれか。
 - a. キリスト教は世界宗教で、ヒンドゥー教は民族宗教である。
 - b. イスラム教は世界宗教で、仏教は民族宗教である。
 - c. ヒンドゥー教は世界宗教で、ユダヤ教は民族宗教である。
 - d. 仏教は世界宗教で、イスラム教は民族宗教である。

2. 本文の論旨からすると、宗教の絶対性主張に似ているのは、次のうちどれか。
 - a. ある農家が自分で生産したリンゴの糖度を計って「うちのリンゴは日本一だ」と言った時。
 - b. 幼稚園児が自分を迎えに来た母親を見て「私のお母さん世界一よ」と言った時。
 - c. プロボクサーのチャンピオンが試合に勝って「われこそは世界一だ」と言った時。
 - d. 受験生が全国模擬試験で一番の成績を取って「自分こそ日本一だ」と言った時。

3. 本文の説明からして、信仰が恋愛に似ているというのは、次のどの意味においてか。
 - a. どちらも、ある特定の対象をもつ。
 - b. どちらも、ある一時期だけの現象である。
 - c. どちらも、相手を選ぶのに一定の基準がある。
 - d. どちらも、自分一人の力では始めようがない。

4. 検索結果によれば、新約聖書においてイエスは一度も「偶像」という言葉を使っていない。このことから言えるのは次のうちどれか。
 - a. イエスは「偶像」という概念を知らなかった。
 - b. イエスは「偶像」という言葉を知っていたが、それをあえて使わなかった。
 - c. イエスが他の神々を「偶像」と考えたことはなかった。
 - d. イエスの「偶像」についての知識や評価は、このことだけではわからない。

5. 現代人が「私は神を信じます」と言うと、「あなたは神が存在することを認めるのですね」と言われる、と論じられている。では、この問いに近代以前の人がしたと思われる返答のうちで、もっともありそうなものは次のうちどれか。
- 「あなたが信ずるといのはどの神のことですか。」
 - 「あなたは神が語ることを真実であると認めるのですね。」
 - 「あなたは神を人生の導き手として信頼するのですね。」
 - 「あなたの言っていることは誰もが当然だと思うでしょう。」
6. 本文の趣旨に基づくと、5頁の二つの文章(A)と(B)との対比を説明する文としてもっとも適切なのはどれか。
- Aでは天気のこと焦点であるが、Bでは彼女の心が焦点である。
 - Aでは実際に雨が降っているが、Bでは実際には雨が降っていない。
 - Aは雨についての主観的推論で、Bは雨についての客観的事実である。
 - Aは自己の信念を語っているが、Bは他者の信念を語っている。
7. 「ファンダメンタリズム」について述べたものとして、間違っているのはどれか。
- その宗教の根本教義についての独自な見解をもつ。
 - その宗教が昔から信じてきた内容をそのまま信じ続けている。
 - その名称は、前世紀初頭のアメリカのキリスト教に由来する。
 - その名称は、現在キリスト教以外にも適用されて使われている。
8. 19世紀半ばに無神論の祖と言われるフォイエルバッハは『キリスト教の本質』と『宗教の本質』を書いたが、これは本文の趣旨からすると、どのような意味で重要であるか。
- 宗教やキリスト教がある本質をもつ実体的な体系と考えられるようになった。
 - 19世紀にはキリスト教が諸宗教の中の一つと見なされるようになった。
 - 宗教の本質とキリスト教の本質とが別々に考えられるようになった。
 - 宗教やキリスト教が否定されるべき対象として論じられるようになった。
9. 本文によれば、“religion”という英語が長く単数形でのみ用いられたのはなぜか。
- ヨーロッパ人にはキリスト教という一宗教がもっとも身近に知られていたから。
 - 歴史的にキリスト教のみが真の宗教であると考えられていたから。
 - 心のあり方を表現する言葉として、不可算名詞だと考えられていたから。
 - 近代啓蒙主義以前には、宗教が儀礼や教義の体系として考えられていたから。

10. 欽定訳聖書では、“faith”が233回使われているのに対し、“belief”は1回しか使われていない。本文の趣旨に照らして、このことの説明として正しいのは次のうちどれか。
- 17世紀初頭の英語では、“belief”という単語は一般の人々にあまり知られていなかった。
 - ジェームズ王の命令で訳された聖書であるから、臣下の恭順をあらわす“faith”の方が好まれた。
 - 当時の人々は、聖書の「信仰」概念を表現するのに“faith”という言葉の方が適切であると考えた。
 - 二つの言葉はいずれにしても翻訳であるから、その違いは原語を調べてみないと何もわからない。
11. 寛容の発展を阻害したさまざまな例を挙げることができるが、以下のうち本文で論じられたことと直接関係のないものはどれか。
- トマス・モアが『ユートピア』で寛容を論じながら、後に大法官になると異端者の取り締まりを強化したこと。
 - フランスのプロテスタント教徒に礼拝の自由を許した「ナントの勅令」を、ルイ14世が87年後に撤回したこと。
 - ロックの『寛容論』が、カトリック教徒やイスラム教徒や無神論者を寛容の対象から除外したこと。
 - 宗教改革者のカルヴァンが、セルヴェトゥスに異端と秩序紊乱の罪で死刑を勧告したこと。
12. 『パンセ』の中でパスカルは、信仰を求めながら得られないでいる人に、あたかも「すでに信じているかのように、聖水を受けミサを唱えてもらう」ことを勧めている。本文の趣旨からすると、このことの説明としてもっとも適切なものは次のうちどれか。
- カトリックの信仰は、プロテスタントよりも大雑把でおおらかである。
 - 信仰には、頭の中で何かに同意すること以上に大切なことがある。
 - 信仰は自分の意志と関係なく、聖水とミサによって神から与えられるものである。
 - パスカルは、信仰をあくまでも人間の振る舞いとしてとらえていた。
13. 本文の趣旨によれば、ピューリタンと宗教の寛容や自由との関係を述べたものとしてもっとも適切なものは、次のうちどれか。
- ピューリタンは、自分たちの宗教的自由を主張したが、他者には不寛容であった。
 - 宗教の寛容や自由は、歴史上ピューリタンが最初に生み出した思想である。
 - ピューリタンは原理上は不寛容であるが、実際面では寛容であった。
 - ピューリタンのなかには、宗教的自由の確立に重要な貢献をした者もいる。

14. 「信仰」の理解の変遷を述べたものとしてもっとも適切なものは、次のうちどれか。
- 中世とルター以後のプロテスタント神学とでは、信仰という行為の分類のしかたが同じである。
 - ルターと後のプロテスタント神学とでは、信頼という要素に対する評価がまったく同じである。
 - トマスは信仰の主たる働きが意志によるものと考えて、後のプロテスタント神学を基礎づけた。
 - プロテスタント神学は、ルターに倣って信仰における知性の働きを重要であると考えた。
15. “Faith”という言葉にもともと含まれていなかった意味成分は、次のうちどれか。
- “Commitment”
 - “Loyalty”
 - “Dedication”
 - “Intelligence”
16. 「偶像」に言及した聖書の中の文章で、本文の説明による「第二のカテゴリー」に入るのは、次のうちどれか。
- 「偶像を仰いではならない。神々の偶像を鑄造してはならない。わたしはあなたたちの神、主である。」(レビ記 19:4)
 - 「彼らは先祖の神、主の神殿を捨て、アシェラと偶像に仕えた。この罪悪のゆえに、神の怒りがユダとエルサレムに下った。」(歴代誌下 24:18)
 - 「無力な神を造り、役に立たない偶像を鑄る者はすべて、その仲間と共に恥を受ける。」(イザヤ書 44:11-12)
 - 「わたしの愛する人たち、こういうわけですから、偶像礼拝を避けなさい。」(一コリント書 10:14)
17. 仏教の「因縁」「縁起」の説明として間違っているのは、次のうちどれか。
- 結果を生じさせる内的な原因を「因」、外的な原因を「縁」、合わせて「因縁」と言う。
 - 因縁によってものが生滅変化することを「因縁生起」、略して「縁起」と言う。
 - 災いの「因」は自己にあり、幸いの「縁」は他人にある、と教えるのが「因縁」である。
 - すべての存在が相互依存的な条件によって成り立っている、というのが「縁起」の意味である。

18. 本文の説明を手がかりにすると、イスラム教徒の宗教的義務である「五行」に含まれないのは、次のうちどれか。
- 男性も女性も、一生に一度はメッカへの巡礼を果たすこと。
 - 女性が公的な場面で身体を覆うなどの慎みをあらわすこと。
 - 「アッラーは唯一の神である」という信仰を告白すること。
 - 一定以上の財産をもつ者が貧しい者などに施しをすること。
19. “Credo” というラテン語動詞は、英語では “I believe” と訳されるが、その語義を分解すると、“cor” は「心」、「do」は「与える」という意味である。本文の説明からして、このことの解説として正しいのは、次のうちどれか。
- “Credo” は、“I believe” ではなく “I know” と訳されるべきである。
 - “Credo” の本来的な意味は、「知的同意」よりは「心の信頼」に近い。
 - “I believe” は、“credo” の翻訳として本来的な意味の上でも適切である。
 - “I believe” は、“credo” よりも “cogito” の訳として適切である。
20. ウィルフレッド・キャントウェル・スミスについての説明で、正しいのは次のうちどれか。
- 彼は、日本ではあまり知られていないピューリタンの寛容論を論じた著者でもある。
 - 彼は、宗教に関する検証可能な命題の重要性を指摘して、「語用論」を新たに展開した。
 - 彼は、他宗教に「偶像礼拝」という言葉を使うべきでないことを、聖書の研究から結論づけた。
 - 彼は、イギリス経験論哲学の著作を調べ、“believe” という動詞の意味の変遷を論じた。
21. 本文の説明からすると、イスラエルの人々のエジプトへの心理的関係の描写として適切なものは、次のうちどれか。
- 警告を受けているが魅力的である。
 - 脅かされているが征服可能だと思っている。
 - 干渉的だが友好的態度を崩さない。
 - 抑圧されているが無関心である。
22. 以下の文章のうち、本文の趣旨と一致しているのはどれか。
- 現代の諸宗教は、テロリズムや民族対立の温床となることが多い。
 - 現代の諸問題は、お互いが他宗教の教義を十分に理解すれば解決できる。
 - 宗教の真理は、現代では命題に宿ると考えられるが、近代以前には非命題的であった。
 - 結局のところ、諸宗教は異なった名前を使うが信じている内容は同じである。

23. ロジャー・ウィリアムズについての説明で、正しいのは次のうちどれか。
- a. 彼は、政教分離の原則を定めてピューリタン主流派の思想を実現した。
 - b. 彼は、信仰上の相違が原因でロードアイランド州を追放された。
 - c. 彼は、どのような信条をもつ宗教でも神の意志に適っていると信じた。
 - d. 彼は、信教の自由こそ人間の根本的な権利の一つであると主張した。
24. スミスの言う意味での「異端」を含んでいる文章は、次のうちどれか。
- a. キリスト教はユダヤ教の異端であり、仏教はバラモン教の異端である。
 - b. 神道には明確で体系的な教義が存在しないから、神道は宗教ではない。
 - c. 処女降誕や復活などの奇跡を、非合理と認めつつ無批判に信ずる。
 - d. お経の意味を知らずに、座禅を組んで仏教の教えを知ろうとする。
25. 本文の趣旨からすると、“believe”という動詞の用法の説明として正しいのは、次のうちどれか。
- a. 近代以前には、“I believe his statement, but I do not trust him.”は奇異に感じられたであろう。
 - b. 近代以前には、“I believe in God and pledge my devotion to God.”とは言わなかったであろう。
 - c. 今日では、“What he believes is false.”を“What he knows is false.”と言い換えても奇異ではない。
 - d. 今日では、“She believes that A is B.”と“She imagines that A is B.”とは意味が正反対である。
26. 本文の趣旨からすると、旧約聖書における他民族の神々についてもっとも適切な理解を述べているのは、次のうちどれか。
- a. イスラエルの神以外には、そもそも神は存在しないと考えられている。
 - b. 他民族がそれぞれ自分たちの神々を礼拝することは、非難されている。
 - c. イスラエルの人々が他民族の神々を礼拝することは、否定されていない。
 - d. 他の民族に他の神々がいることは、当然であると考えられている。
27. ウィリアムズが「政教分離」体制の確立に努力した理由は、次のうちどれか。
- a. 世俗主義の立場で、宗教から政治権力の独立性を守ろうとしたから。
 - b. ピューリタン社会の秩序安定と政治的發展のために必要だと考えたから。
 - c. 万人の宗教的自由を認めることが神の意志であると確信していたから。
 - d. 人間は誰も究極の真理を正しく把握することができないと考えたから。

28. ラテン語の“ab-solutus”という語源で説明された「絶対」の意味に含まれないのは、次のうちどれか。
- 自存
 - 無制約
 - 非関与
 - 最高
29. 旧約聖書の「十戒」には、「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」(出エジプト記 20:3)と書かれている。この規定と本文の説明とはどのような整合性をもって解釈されるか。次のうちもっとも適切なものを選べ。
- イスラエルの人々は、世界には自分たちの神だけが存在すると信じてつゆ疑わなかった。
 - 世界には自分たちの神以外にもさまざまな神がいる、という認識が前提となっている。
 - イスラエルの周辺世界にいた人々は、イスラエルの神だけが真の神であると認めていた。
 - 旧約聖書の唯一神教からすると、「十戒」にはきわめて例外的な認識が示されている。
30. 「信ずるといふ異端」が始まったとされるのは、次のうちどの時代か。
- 異端審問の時代
 - 宗教改革の時代
 - 文芸復興の時代
 - 啓蒙主義の時代
31. 「真の宗教」を書いた時、アウグスティヌスは次のどの点に「真」の意味を見いだしていたと考えられるか。
- キリスト教の教義が他宗教との比較において優れている点。
 - キリスト教には神との人格的な交わりが見いだされる点。
 - キリスト教では他宗教に比べて音楽や芸術に重点が置かれている点。
 - キリスト教だけが敬虔を一つの論理的な体系に結実させている点。
32. 次の文章のうちで、本文の論述に基づいてもっとも適切だと言えるのはどれか。
- 古代エジプト人は牛を見る時、常に空のように広いものとして見ていた。
 - 現代人は牛を見る時、観察によって検証可能な対象としか見ることができない。
 - 古代エジプト人にとって、牛と空は別のものであり、かつ同じものでもある。
 - 現代人が見る牛と古代エジプト人が見た牛とが共通の意味をもつことはあり得ない。

33. 本文の趣旨からすると、蠅と金魚との関係はどうあるべきか。
- 蠅は金魚の餌となって献身する。
 - 蠅は金魚に有効な助言を与える。
 - 蠅は金魚に寛容の原理を説く。
 - 蠅は金魚を尊重しつつ見守る。
34. この文章全体に副題をつけるとしたら、次のうちどれがもっとも適切か。
- 「信仰と異端の変遷を探る」
 - 「他人の宗教を理解する」
 - 「寛容の歴史的起源を求めて」
 - 「宗教の絶対性主張を再考する」
35. 本文の説明によれば、寛容が有効に機能するのは、どのような時か。
- 一般大衆が理想と現実の差に倦み疲れる時。
 - 為政者が状況の変化に適切に対応する時。
 - 寛容や自由の価値が自覚的に追求される時。
 - 知的エリートが宗教的な指導力を発揮する時。
36. 次の組み合わせのうち、二人とも啓蒙主義よりも前の時代の人物であるのはどれか。
- ルターとウィリアムズ
 - ヴォルテールとルソー
 - ペーコンとヒューム
 - チャーサーとミル
37. 新約聖書から、非キリスト教徒の神を「偶像」と呼んだ唯一の例が挙げられているが、それは次のどこの人々の神について言われたものか。
- バビロニア
 - エジプト
 - アテネ
 - コリント

38. 論理実証主義では、「カエサルは複素数である」とか「現在のフランス国王は髭をはやしている」などの命題は検証不可能なため、意味をもたないとされる。以下の命題のうち、論理実証主義の立場から意味をもつと言えるのはどれか。
- a. 「シーラカンスは古代の魚類の形態を保っている。」
 - b. 「人間は一本の葦である。」
 - c. 「モナリザの微笑はどんな女性の微笑よりも美しい。」
 - d. 「2000年度のソヴィエト連邦の人口は約2億9300万人であった。」
39. スミスによれば、宗教言語が適切に理解される際に重要と考えられることは、次のうちどれか。
- a. 言述が人から人へと伝えられる過程で、固有の意味を獲得する。
 - b. 言述の意味が固定されず、多義的なままに保たれる。
 - c. 言述が観察に基づく経験的命題によって裏付けられる。
 - d. 言述に含まれる記号がその指示対象から遊離する。
40. キリスト教原理主義を聖書とのかかわり方においてとらえた理解として、間違っているのは次のうちどれか。
- a. キリスト教原理主義は、聖書の近代的理解に対する反動である。
 - b. キリスト教原理主義は、聖書に固有の信仰理解とは異なっている。
 - c. キリスト教原理主義は、聖書の核心的原理への忠実な回帰である。
 - d. キリスト教原理主義は、聖書に含まれる特定教義への同意を求める。